

# 朝日新聞

本日の編集長＝岡村邦則  
電話03-3545-0131 www.asahi.com

## 首都圏発

# 日本酒、海外へ活路

## 国内苦戦の中、昨年の輸出量最高

各地の酒造会社が日本酒の海外への輸出に力を入れ始めている。首都圏など国内の消費が伸び悩んでいるなか、昨年の輸出量は過去最高となった。輸出先もこれまででの米国や台湾から、ロシアなどに広がっている。

## 和食ブーム追い風

「WANDERING POET」「Dreamy Clouds」

1882年創業の李白酒造(松江市)が製造した純米吟醸酒と特別純米酒(にごり酒)には、こんなラベルがつけられている。「R I H A K Uでは覚えてもらえない。愛称をつけ、親しみやすくしました」。田中裕一郎社長は言う。

長く首都圏など国内に販売してきた同社が力を入れるのは、海外への輸出。米

国向け輸出は、約10年前は

1キロリットルに満たなかったが、昨年は50キロリットルに増えた。昨年の総出荷量は320キロリットルのうち、米国など輸出分は70キロリットルになる。

「日本酒の国内市場が厳しい中、地方の地酒メーカーは東京を目指す、競争は激しい。生き残るには、海外に目を向けざるを得ない」。田中社長は話す。

国税庁によると、日本酒の販売量は1975年度に167万5千キロリットルだったが、年々下落傾向が続



日本酒の試飲イベントに参加したロシアの人々。アルコール度数についての質問が多かったという＝モスクワ、2010年、株式会社日ソ貿易提供

き、2010年度は58万9千キロリットルに落ち込んだ。昨年度は16年ぶりに出荷量が前年度を上回ったものの、日本酒造組合中央会は「完全に回復しているとは言えない」という。

首都圏でも落ち込みが目立っている。成人1人あたりの日本酒販売量は、東京、千葉、神奈川、山梨1都3県(東京国税局管内)の平均で06年度は6・1リットルだったが、10年度には5・3リットルに落ち込んでいる。こうした状況のなかで、酒造メーカーは海外に視線を向けている。

貿易統計によると、昨年の日本酒の輸出は1万4014キロリットル。昨年の全出荷量59万9496キロリットル(国税庁調べ)と比べると

## 米韓や台湾に続きロシアへ

と2%程度だが、10年前の約2倍で過去最高だった。米国が3割近くを占め、韓国、台湾が続いている。日本貿易振興機構(ジェトロ)によると、海外でも和食と一緒に大吟醸など高級酒を楽しむスタイルが目

立ち始めた。韓国では居酒屋で度数の低い日本酒を置く店が増え、愛好者のすそ野は広がっているという。日本経済研究所は「背景には世界的な和食ブームがあり、日本酒の需要も高まっている」とみている。

輸出先は広がりをみせている。2005年11月、六本木ヒルズ(東京都港区)にある高級レストラン。6、7人の外国人がシャンパンや赤ワインを相次いで注文する中、目つきの鋭い男の前に日本酒のおちょこが置かれていた。

男はブーチン・ロシア大統領。熱かんにすしをつまみながら、同席した柔道五輪金メダリストの山下泰裕さんに「私は温かい酒が好きだ。寒いとき、温かい酒を飲むと体が温まる」と話した。「外国人と会食する機会が多いが、熱かんに好む外国人はあまりいない」と山下さんは振り返る。

商社「日ソ貿易」によると、日本食レストランがモスクワで400店以上あり、和食の高い人気が続いていることから、ロシアに目を向ける地酒メーカーも出てきた。

1892年創業の尾畑酒造(新潟県佐渡市)。米国やシンガポールに加え、昨年初めて本格的に「真野鶴」(純米吟醸、500キロリットル)など計100ケースをロシアに輸出した。高級日本食レストランや高級食料品店に並べられた。輸出手続きが煩雑な面もあるが、尾畑留美子専務は「有望な市場。今年度は300から500ケースの出荷を見込んでいる」と話す。

ロシアなどを対象にした

(藤方聡)